

私たちが要求してゐるものは素直な上にも素直な人間そのものの聲や、脈搏を聴かんことである。

沙翁の作品、ミケランゼロの作品、近松の作品が偉大であればあるほど、それ等は素直な人間の姿を描き、偽りない人間の心を、素直な人間性そのものを語つてゐるものである。

×

愛といふ言葉を、直ぐに人類といふものに結びつけなければ、愛は完きものでないかのやうに考へてゐる人がある。そのやうな愛に限つて偽善的な、自負的な、ひとりよがりになり易い。

「汝等祈る時はたゞ一人にて祈れ」とキリストは言つたが、愛も靜かなるところに於いてのみ愛の深さ、切實さ、眞實さを味ふことができる。愛もたゞ一人である時、最も強く、最も純であるべき筈だと思ふ。

愛といふ言葉は直ぐに對他的に考へ易い。しかし愛は對他的な力といふよりは、むしろひとりで自分のうちに燃ゆる個性の香である。或ひは魂の香である。

愛を與へるといふ言葉ほど偽善的な感じを抱かせるものはない。

愛はあたへるものでなくて、一等素直な自分を、一等素直に生かして行く、または伸ばして行く、生活感激そのものである。草が芽を伸ばして行く刹那に、草が根を張つて行く刹那に、小鳥が歌ふ刹那に感ずる生活感激は愛である。

人がたゞ一人である時、何の虚偽も、見せかけもなく、ほんたうな彼自身を靜かに内省する刹那に、彼自身のうちに泉のやうに溢れて来る生活感激は愛でなければならぬ。自身のうちに至純な生活感激が強く溢るれば溢るゝほどその人の愛は純なものであり、強いものである。そのやうな愛の所有者が他人に對する時、その人の愛は他の人の心のうちに愛を目覺ます電波的な力となるにちがひない。

その人の眼、その人の顔、その人の言葉、更に一層その人の沈黙は、周圍の人々に對して愛を目ざます電波的な力を持つてゐなければほんたうな愛ではない。

×

愛は人間の世界に天國を見出すことである。一人の戀人を眞實に愛することのできる人はたしかに一つの天國を見出すことができるにちがひない。

個々の人間の魂には、はかり知れぬ深さ、神祕さをたゞへた天國が潜んでゐる。個々の人

間の魂の底には無限そのものの脈搏や呼吸がさながら動いてゐる。

プロメシウスは天上の炎を盗まんが爲に天に昇つて行つた。ドストイエフスキイは天の炎を見出さんがために貧しき女ソオニヤの胸のなかに、賤しい女グリユセンカのなかにひつて行つた。

愛は貧しい人間と貧しい人間、弱い人間と弱い人間との間に見出さるゝ天界の法悦である。感激である。實感である。

近松の心中物のなかに見出さるゝ男と女との道行きには何時も、未來の樂土が彼岸の眞實境として描かれてゐる。けれども道行きを急ぐ刹那の男女の心のうちに既に至純な樂土の實感を生れてゐる。死ぬほどに人を愛する心のうちにのみ、無限そのものよるこびなり、智慧なり、悟りなり、大悲なりが如實に味覺せられるであらう。

「人に人をさばく權があるか？」と言つたトルストイの言葉は私達の日常の生活に向つと當てはめて考へなければならぬ。

私たちは人を批評する時、その人の缺點を餘りに多く見出し易い。しかも更に一層細かく

考察して見たらば、それは決してその人の缺點でなく、却つて美點であることも少くない。

私たちは恰度裁判官が罪人に對して比較的簡單に黑白を決めてしまふのと同じやうなやりかたで、大ざつばに一個の人間の價値や、人となりを決めてしまひたがる傾がある。

このやうなやり方は決して正しい人の見方ではない。宗教的に言へば、これは神の殿堂を汚すものである。

奥行きのないほど深い人間を、たゞその外部にあらはれて來る折々の閃きだけによつて批判するくらゐ恐ろしいことはない。このやうなあわたゞしい批判は、人間を見ないで何時も幾つかの死んだ型のなかに、生きた人間を押し込めようとするものである。千人の人間が千人それ／＼にちがつた缺點と同時に、ちがつた美點を持つてゐる筈である。即ち個人個人の味、個人々々の魂の香を持つてゐる筈である。

愛は個々の人間の奥底から、その個々独自の魂の味や香を掴み出すだけの忍耐を持つてゐなければならぬ。

x

ツルゲーネフの散文詩のなかに、乞丐に錢を乞はれたツルゲーネフが、生憎ポケットに一文

の錢も持たなかつたので、乞丐の手を握つて「友よ！」と呼んだところがある。あの作者の心持ちほどしみじみと尊く思はせられるものはない。あの刹那に二人の間には美しい天國が生れたにちがひない。

あの刹那には兩者の何れにも與へるとか與へらるゝとかいふやうな意識はなかつたであらう。兩者の心に動いてゐたものは恐らく「何うも濟まないが！」といふやうな謙虚な心と心との結び付きであつたらう。

物を與へることによつて生るゝ愛は大抵不純なものに陥り易い。それは救ふ者をも、救はるゝ者をも汚すことが多い。

涙を分つことのできる愛、魂を打ち出してかゝることのできる盲目的な愛のうちにほんたうな人間の相が見出さるゝ。

愛を説く説教師の愛、職業的労働運動家の愛には、どうかすると砂でも嘔ませられるやうな不快さが混つてゐることが多い。

今日、イエツのものを讀んだ。シングが死の床に就いてからイエツに向つて、「Oh what

a waste of Time」と言つて、死を悲しんで、もがいたことがちよつとほのめかしてあつた。

死ほど恐ろしいものはない。シングを尙少し長く生かして置きたかつたと、はたの人にさへ思はれたのだから、若いシング自身にとつてはそれは何んなにか悲しいことであつたらう。

ほんたうに死ぬことは恐ろしい。健康が欲しい。

自分の魂のために

世間が何のやうな藝術を要求してゐるかといふことは私自身にとつては問題とはならない。私自身が果して何のやうな藝術を要求してゐるかといふことが第一の問題である。

ほんたうに自分を見出すといふこと、ほんたうに人間そのものを見出すといふこと、これは自然主義の根本的な試みであつたにちがひない。けれども今までの自然主義では一方に片寄り過ぎた人生のみを見て來たやうな傾向が多い。もつと人間らしい人間の姿を見出して、その人間らしい人間の魂なり、生命なりを伸びるだけ素直に伸びさして行かうとするのが私たちの今日の努力であるやうに思はれる。そしてこの新しい仕事は眞實に人間の魂、生命そのものを掴んだ人でなければ成就することはできない筈である。

人間の魂を掴むといふことは、既に出來上つてゐる魂の相なり、深さなり、廣さなりを見出すといふことではない。無論人間の魂には無限の深さや廣さを持つことのできる潜在の力

があるにちがひない。しかしそれはたゞ蓄積せられた可能性に過ぎない。潜在する無限な人間力の開拓、整理、更に人間力の伸展、新生に對して絶えず全我的な創造の試みを繰り返して行くことによりて、人間の魂は深められ、廣められ、新しくせられて行くであらう。人間そのものの魂を掴むといふことは、畢竟、魂そのもののこの變化を、進化を、或ひは深められ、新しくせらるゝ魂の脈搏を絶えず實感しつゝあるといふ意味である。魂の生長を實感することのできる人のみが魂の創造を企つる。

藝術の尊いところは、絶えず魂を深め行くところにある。絶えず人間性そのものを大きくして行くところにある。新しくして行くところにある。魂の更に深い相が発見せられない時私たちの藝術に倦怠が生れる。魂の更に新しい力が創造せられない時藝術がコンゲンシナルなものとなつて來る。

藝術家にとつて最も恐ろしいことは、世間の要求を知らないことではなくて、自分自身の魂の相を見失ふことである。魂の深所を更に深くして行く創造の苦惱を忘るゝ事である。

藝術はいつも藝術家自身の魂のために存在するものでなければならぬ。

新しい藝術を造り出すといふことは、新しい魂を見出すといふことである。更に新しい魂

を、更に新しい人間性を創造するといふことである。

新しい藝術は人生觀照の態度を變へることによりて見出さるゝものではない。新しい人間の魂の深さを廣さを、創造したる天才によりてのみ新しい藝術は生れる。

藝術にひそむ新生の力

私は學究者を尊敬する。たゞしかしかれが眞人間の心情を持つてゐる場合に。

また私は藝術家を尊敬する。教育家、宗教家を尊敬する。たゞしかしかれ等が眞人間の心情と感情とを豊かに持つてゐる場合に。

私は農夫を尊敬する。工夫を尊敬する。兵士を尊敬する。たゞしかし、かれ等が眞人間の言葉を語り、眞人間の涙を持つてゐる場合に。

名譽のために、打算的な考へのために小さかき智慧を働かすところの學究を排する。教育家や宗教家を排する。小作人を、兵士を。

人間であるの光榮は學究たるが故に存在するのではない。宗教家たり、教育家たるが故にも存在するのではない。

人間であるの光榮は、私たちが眞人間であり、眞人間の心を持ち、眞人間の涙を持つところ

るに存在する。また私たちが學究の徒となり、藝術家となり、宗教家となり、教育家となるのも、實は眞人間の心をくみ、眞人間らしい生活を營まんがために他ならぬ。

眞人間の生活を忘れた學究、藝術、宗教、教育、農業すべては私たちにとつて無意義である。眞人間はつねに嬰兒の心を持つ。嬉しきことに面して笑ひ、悲しきことに面して泣き、不正なることに對して憤る。

その泣くことも、笑ふことも、憤ることも眞情そのものの發露である。たとへば風に吹かれたる草の葉が揺れるやうに、風に打たれた波が立ち上るやうに、五つの原動に對する五つの反動である。

そこには何の掛け引きもない。何の打算的な考もない。かれ等にとつては怒ること、泣くこと、笑ふこと、すべてが自然のまゝである。

キリストもさうであつた。釋迦もさうであつたであらう。良寛も白隠もさうであつた。

心の底から大きな聲を絞つて笑ふことのできぬ近代人、心の底から大きな聲を絞つて泣くことのできぬ近代人の生活は決して全き生活ではない。

無論久しい間世紀末の病に取り憑かれてゐた近代人の心の底には、まだく脱けやらぬ灰色の氣分がのこつてゐる。

ゴンチヤロフの「オブローモフ」はいつも寢床のなかに寢込んでばかりゐて、「いつたい人間といふものは起きて働く必要があるのか？」といふやうな疑問を發してゐるが、寢床から起き上つた人間として私たちはツルゲーネフの「ルウディン」を想ひ出す。

併しルウディンは寢床から起き上つて來たゞけで、まだく實行者ではなかつた。ルウディンもやはり空想の寢床に眠つてゐた。今日私たちの社會にはまだオブローモフがあり、ルウディンがあるにちがひない。

更にまたこれから後幾百年の間、チーホフの「叔父ワーニヤ」があるにちがひない。

オブローモフ型の人、ルウディン型の人、ワーニヤ型の人、心から大きな聲を出して泣くことも笑ふこともできない人々である。

このやうな種類の人々にとつては大きな聲で泣かぬこと、笑はぬことが自然である。私たち自身まだ餘りに多くのオブローモフを持ち、ルウディンを持つてゐることを悲しむ。

私たちはこのやうな心の弱い、宿命的な性格の人々に對しては心からの同情を寄せないで

は居れぬ。

ツルゲーネフもこの種類の人であつたらう、チャーホフもさうであつた。

「どうせ人間は一生もだえ抜いて、しまひには頭を石に打ちつけて死ぬんだ」といふ消極的な考しか持つことのできなかつたチャーホフにとつては、あの悲しみにも泣くことのできなかつた不幸な人々を描くといふことは自然であつた、眞實であつた。

x

私がこゝにいふところの心の底から笑ふことも、泣くこともできない人々といふのは、チャーホフや、ツルゲーネフとはちがつた意味の人々である。

それは今日、多くの社會に見る餘りに打算的な、小さかしい、目から鼻に抜けるやうな小悪魔的な人々を指してゐるのである。

文明人の弊害、都會人の弊害、現代人の弊害の最も大なるものは、ぼろを出さないといふことである。お上手に纏まりをつけるといふことである。手際善く物を作り上げるといふことである。

かれ等の特色は巧に纏まりをつけるといふことである。

しかしこゝに大きな物の缺乏がある。

即ち氣魄の弱いことである。原始人的の野性力のないことである。

かれ等は既に大きな聲で笑ひ、泣き怒るだけの氣魄さへ失つてしまつてゐるのである。

彼たちは力を持たなければならぬ。氣魄を持たなければならぬ。

私たちは物の不完全を杞てはならぬ。完成者は後から来る。私たちはいつも先驅者でなければならぬ。

私たちはミケランゼロにならなければならぬ。レオナルド・ダ・ヴィンチにならなければならぬ。

人生には、人類の歴史には完成といふことはない筈だ。

藝術にも完成はない筈だ。一つの藝術は永遠に伸びんとする力の一步の歩みである。小さく歩いて、それで止まつてはならぬ。大きく跨いで、いつも舊き物を破つて行かなければならぬ。

小さな藝術家は一つの破綻もない藝術を作り上げようとする。大きな藝術家はいつもただ自分の無限の氣魄を無限に伸びひろがらせることのみを考へる。小さな破綻や、手際のみ

づさなどを考へてゐる暇はない。

大きな藝術家が盛らんとするところのものは、大きな悲しみであり、大きな憤りであり、大きな笑である。そこには色々な破綻やひびれがあるであらう。しかしそこには大きな眞人間の魂の響がある。

小さな藝術家は、小さな、品のいゝ笑ひ方を藝術に盛る。品の宜い、おつくりをした上流婦人の泣き聲を藝術に盛る。であるから、その藝術には品の宜い纏まりがある。

しかし、そこには人をどん底から動かすだけの氣魄がない。人を心の底から泣かせ、笑はせ、憤らせるの力がない。

大きな赤ん坊生れよ。

今日の宗教界にも教育界にも藝術界にも大きな赤ん坊が欲しい。

南國の町と島

長崎の町は伊太利の港に似てゐると言つた人があつた。
恐らくさうであらう。

山と山の懷にいだかれた南國の港町。

山には城のやうな石垣を積み上げたお寺が多く、それがみんな登を敷いた道で聯ねられてゐる。

暗い大樟の蔭には古びた山門がある。支那のお寺もあれば、舊教のお寺もある。
長崎は古いお寺の町である。

ローマの七つの丘を想はせるやうな丘から丘の間を登の道がつらなつて、軒の低い古風な窓からは人懐かしさうに色の白い女たちが南國的な黒い瞳をかゞやかせて、街の旅人を見てゐる。

長崎の町はコスモポリタンの町である。

支那人の血を引いた人、ポルチュガルやスペインやオランダやロシアやイギリスやイタリヤ、ほとんどすべての人種の血を引いたやうな人たちが、出島や大波止あたりを歩いてゐる。

支那人と日本人との間には長崎の町では、もう異人さんといふ觀念も失はれてゐるやうに思はれる。

x

オランダの古い繪に見るやうなアーチ型の石の橋、或ひは誰かの繪にあつたダンテがピアトリチエに見とれてゐた川岸のやうな船着場が、長崎の海岸には幾らも見られる。

マニラ還りのアメリカの水兵も長崎の町では無邪氣なヤンキイとなつて騒いでゐる。アメリカ印度人の兵隊も長崎の波止場では大きなパイプを啣へて、子供のやうな顔をして歩いてゐる。

たまには日本の娘に冗談の一つも言つてゐる。しかし長崎の町ではアメリカのやうな恐ろしいリンチはない。

長崎の町はコスモポリタンの天國である。

ゴンドラはないが、水の町には美妓を乗すべき小舟は月の夜毎に、まつ黒な船頭の腕で巧に操られてゐる。

夜は海に沿うた異人さんの酒場でマドロスの唄が聴かれる。

古い教會堂の石段の上では、あやしげな猶太の女が、マンドリンを弾くマドロスの傍に腰かけてゐる。

x

夏から秋にかけて、近在の田舎から草花を賣りに来る女たちは、ローマの郊外からローマにはひつて來るといふ花賣少女たちを聯想させる。

花は女郎花、蝦夷菊、吾木香、姫百合といった風な極ありきたりの花である。花には露がまだいつぱい落ちてゐる。女たちの紺の手甲、脚絆が目につく。

花賣り女たちの後からは大きな牛がのそくとやつて來る。牛には肩から首にかけて數十の鈴がつけてある。

牛が歩きたんびに鈴の音ががらん／＼と涼しい朝風につたはつて來る。

首から小さな十字架をつるしたクロと呼ばれる顔色のわるい舊教徒たちも見られる。浦上の奥には何十年か前から、舊教徒達の寄進の煉瓦で築き上げられてゐた教會堂が丘の上に建つてゐた。

一年に五寸か一尺ぐらゐづつ積み上げられて行くので、まだ出来上らないうちに、下の方には蔦がまとひついてゐたが、このころでは恐らく丘の上に高く聳えてゐることであらう。鐘も響いてゐることであらう。

牛の首の鈴の音に驚いて、クロの教會堂の裏手の青い山を見ると、そこにはかれ等の先祖が幾日かの間、焼かれ、磔にされた記念の十字架が高くそびえてゐる。

コスモポリタンの歡樂の町は、また殉教者のいたましい墓場でもある。

x

長崎の町をめぐる山の草は青く輝いてゐる。

その青い夏の草の上に十字架が聳え、クロの教會堂のベルが朝にも晝にも夕暮にも響いてゐる。

茂木から長崎の町へはひつて来る峠の茶屋、矢上から来る峠の木蔭、浦上から来る町の蔭、

そんなところでは顔色の悪い男たちが西瓜を割つて頬張つてゐる。

恐らく、昔、そこいらはクロの殉教者たちが、槍にかこまれながら刑場の方へ歩いて行つたことであらう。

西瓜を割りながら、長崎の兄あにしや、または秋の祭のことなどを胸に描いてゐるらしい。

x

恐ろしい朝鮮風が夜晝よるひるの分ちなく二三ヶ月の間荒んで、幾百尋といふ深い海の上に蟲々とそより立つた島の山の地肌も疎になるまで、木の葉を吹き落してしまふと、やがて、甦よみがへつたやうな静かな島の春が還つて來るのである。

まだ冬の荒海の名残が、北の方へ突き出た岬あたりには遺のこつてゐて、黝い岩山を目がけて後から後からと三四丈もあるやうな大うねりが頭を擡たげて、打うつ突かつてゐる、その小山のやうな浪のなかをくゞつて鷗の群の寂しい聲を聽いてゐる間に、既に北から南へ三十五里の間を流れた山の背には柔かな春の光が、一つ一つの草の葉を恵むやうに漲つてゐる。

山蘭や風蘭の花が、殆んど年に一度も人間の足跡をとゞめぬ高い山の上に薫つてゐたり、名も知れぬやうな一本一本の樹がどれもこれも自分等の個性を示すやうに、同じ緑といつて

もみんながそれ／＼に異つた嫩葉の色を輝かして來るのである。冬の風が荒いので、山が高くなるにつれて、幹は途中から切つたやうになつて、延びきれないで、づんぐりむつくりと言つた風な形をしてゐる。

馬酔木に似て、もつと脊のひよろ長い木から、南京玉でもつらねたやうな、或ひは銀絲でも垂らしたやうな可憐な花が、山といふ山、谿といふ谿を埋めて咲く。木犀に似て、木犀よりも尙つと薄くて、柔かな葉の間からは黄色な花がこぼれるやうに到るところの山に咲いてゐる。幾曲りにも彎曲した紺青の淵にのぞんで、垂直に突つ立つてゐる岩の上には、山櫻の花が陽に輝きながら競つてゐる。

この頃である、太陽に向いた山と、太陽に背いた山の香や空氣の感じがはつきりと區別されるのは。

波の音が轟々とまるで遠い嵐のやうに、しつきりなしに聞えてゐる間にでも、私たちはちよつと立ち留まつて暗い谿の方に耳を傾ければ、何の悲しみも、寂しさも知らないやうな鶯の谷渡りなどを幾つとなく聴くことができる。

博多からこの島に來る船の上に、うぐいすあきんど 商人を見るのもこのごろのことである。

春は何處の世界でも早く立ち易い。山の櫻が散つたと思ふころは、島を埋めて海岸の山には薄紅の躑躅が咲く。山の背には菖蒲の花が咲く。山の背からは東の方には北九州の山脈や平戸島が水天髣髴の間に見える。西の方には一層近く朝鮮の山が煙つて見える。

雲雀の唄を浴びながら、三尺にも足らぬやうな島の小馬に跨つた五人、十人といふ女たちの群が、高原の草を踏みにつけて行くのもこの頃である。

島の人たちの生活はこのころから活動期に入るのである。濱の石屋根の上には網が干されたり、濱いっぱいに高い杭を樹て、それに幾段にも網が張られる。それに毎日幾十萬といふ鳥賊が乾されるのである。

鳥賊の乾し場が準備せられるころになると、色々な渡り鳥が島をめがけて集まつて來る。燕と殆んど同じところに黒鳥や時鳥などの群が海をわたつて來る。時鳥は晝日中でも三羽五羽と群をつくつて漁村の空を鳴きながら飛んで行く。

x

平戸から、松浦、壹岐、博多の沖にかけて初夏の太陽の光が白い波路をぎら／＼と照らすやうになる。

一番鳥賊が獲れ出すところになると内地や朝鮮あたりにもた何萬といふ漁船が、一時に對馬の港々に集まつて来る。佐須那だの佐郷だの琴だの嚴原だの幾十といふ小港には、漁期を目あてに内地から流れ込んで来た色の白い女たちが、漁夫對手にあやしげな手つきで三味線を弾いたり、卑猥な唄をうたつたりする。

この女たちのうちには去年この島に渡つて来たことのある女もあれば、初めてこの夏渡つて来た女もある。またかの女たちの對手にする漁夫たちのうちにも、去年来て、今年又来ない男もある。「あの男は北海道に稼ぎに行つた」だの「冬の暴風で到頭歸つて来なくなつた」だのいふやうな話が、荒くれた男と、旅稼ぎの女たちの間に話されることもある。

燕が幾度かこの島を訪れて、また幾度か海をわたつて還つて行く間には、荒くれた男たちも、旅稼ぎの女たちも、墓場さへ持たないやうな死に方をするものもあらう。

x

鳥賊釣りの船が追々内地に歸つて行くと、もう秋風が島と海をつんでしまつてゐる。青い海が寂しい日光に輝くやうになる。朝鮮の島影が青くほの見えて来る。島を遠くに眺めたまゝ立ち寄らないで、大陸から大陸へと行く汽船が、徐かに水平線の上を動いて行く。

白い海鳥の群が千鳥のやうな可憐な聲を残して、波の上を雲のなかに滅えて行くのである。

山といふ山は芒の銀のやうな波に掩はれる。谿といふ谿は紅葉に燃える。その間を清冽な水が瀬をなして流れる。朝と夕暮には霧が山をこめて、それが日光の具合でいろ／＼な色に絶えず變化する。

島の秋で一等うれしいのは月の夜である。甘藷の畑には露が深く落ちてゐる。白い磧からは霧の底から人聲が聞えて来る。

山猫といふ名で呼ばれてゐる地酒に酔うた男たちが、亡國の民を想はせるやうな哀愁をたへた調子の唄をうたふのである。

月に照らされた一つの山を越ゆれば、必ず淡い霧につままれた、他の一つの漁村が、暗い影を作つた山の懷に抱かれて、白い海を控へて横たはつてゐる。燈が見ゆるところ必ず山猫に酔うた島の人々の哀調を帯びた唄が聞える。

x

幾百年來孤島を唯一の郷土として、代々荒い波の上に、或ひは戀し、或ひは酔ひ、やがて死んで行かねばならぬ島の人々の生活を想像すると、うたつてゐる島の人たちよりも、聴い

てゐる旅人の心が暗くされる。

月の夜の漁村の唄が途絶えて來るころは、再び玄海の上に冬の風が日も日もすさびはじめるのである。

内地との交通が幾日も鎖されてしまつて、暗い低い空の下に、あらしを誘ふ大波が涯しもなくつゞく。

濱の漁夫の扉はときされて、鷗の群が沖から濱の方へあらしを避けてつどうて來る。

一人で歩む道

この一ヶ月ばかりの間にいろいろな自分の身邊に起つた一身上の問題で、私の心は日一日と一層沈んで行つたやうな氣がする。私は自分自身に物事を斷乎として決行するだけの勇氣のないことを切に齒痒く思ふ。私はこの一ヶ月ばかり殆んど毎日のやうに家の者にも當り散らすし、家の者を困らせ、苦しませつゞけて來た。私は家の中での暴君であつた。私はまた毎日戶外を歩いた。歩いてゐながらも、いら／＼した氣分の心をどうすることもできなかつた。果は自分で自分の身がいぢらしくなつて來ることもあつた。「結局自分は一人だ」といふ感じが、今までよりも一層痛切に感じられるやうな氣がした。かうなつて來ると、私は自分の褊狭な性格に對しても、冷たい周圍に對しても感謝しなければならぬ。ちいつと自分一人でいろ／＼な苦痛を忍んで行く折くらゐ、ほんたうに突きつめた心で考へさせられる事はない。私はいつまでも自分一人で、自分の道を歩いて行くより他はない。

私は餘り多く友達を持つてゐない。しかし何のやうな人の好意でもありがたいと思つて受け容れることはできる積りでゐる。文壇といふものに始めて出ようとするために、一つの原稿を一年餘りも持ち歩かなければならなかつた頃の苦痛や悲しさは今でも忘れ得ないが、恩師島村先生を半年近くも責めて原稿を読んで貰つて、初めて處女作を出していただゝいたありがたさだけは忘れることはできない。

それから後の私自身の文壇生活を振りかへつて見ると、可なり自分でも寂し過ぎたやうな気がしないでもない、また自分の力の足りないことを悲しくも思ふ。それだけに自分の作品に對して與へられた同情や非難もひし／＼と強く胸に刻みつけられてゐるやうな気がする。批評を氣にしないといふ人もあるが、やつぱり人間である以上は批評は氣にならないことはない。チャーホフは「鷗」のなかであつたかと思ふが、「褒められた時は嬉しい、くさ／＼すれば一日か二日ぐらゐは不愉快だ」といふやうなことを語つてゐたやうに記憶してゐるが、それが人情だと思ふ。故意にされた悪罵や、冷笑を浴びせかけられた時はなかなか十日や二十日で不愉快は除かれはしない。それだけ私は執念深いのかも知れぬが、
 今更さういふをゆりつて、のか、やしん、ドキをうけろ。

×
 自分の天才を信ずることのできる人は幸福である。羨ましいやうな氣もする。しかし其様な人に對しては、到底懐かしい感じを抱くことはできない。その作品からは殆んど動かされない。

罪人を慰めてくれるものは、罪に泣いたことのある人でなければならぬと同じやうに愚な自分を慰めてくれる人間は、最も強く自分の愚を悲しみ、味つた作家でなければならぬと思ふ。

私には天才は要らぬ。眞人間の心が欲しい。眞人間の心を持つた作家でありたい。又眞人間の心を持つた人の作品が欲しい。

眞人間の心持は、天才を欲するやうな人には理解せられない。眞人間の心持は小伶俐な人々には理解せられない。

私は天才を欲する人々や小伶俐な藝術家たちにわかるやうな藝術は生みたくないと思ふ。ほんたうに眞人間の苦惱を分か持つことのできる少數の藝術家や、すべての眞人間たちのために、自分の貧しい收穫をさ／＼げたいと思ふ。

一人で歩む道は寂しい。けれども寂しさや、悲しさや、苦痛は自分一人で忍び、自分一人でちつと押し耐へて行く時、ほんたうに自分を浄化してくれる。

褒められることは嬉しいにちがひない。しかし、無理にも褒めそやされたり、祭り上げられたりする苦痛も大抵なものではあるまいと思ふ。作家の良心が鋭ければ鋭いほど。

× 眞人間といふことを除いては藝術家はあり得ない筈だ。

自分のすべてをさらけ出してかゝるところに藝術の光があり、命がある筈だ。少しでも自分の魂に小柄巧な曇りがかゝつた以上は、その人の藝術は傷けられなければならぬ。

作家にとつては本を読むことも必要であらう、思索をすることは更に必要な事であらう。

しかし眞人間の心を失はないやうに努めて行くことは、更に大切なことでなければならぬ。私の心は絶えず、小柄巧にならうとしてゐる。絶えず不正直にならうとしてゐる。私にとつては本を読むことよりも、思索をすることよりも、小柄巧にならうとする自分の心、不正直な自分の心を鞭打ち、矯め直して行くことが一層大切である。

×

知己は現在にも、何處かには必ずあることを信じてゐたい。正直な心で語られたものは、必ず正直な讀者に訴へるにちがひない。眞人間の聲は眞人間のみに受け容れられる。

知己は百年の後にも必ずあることを信じてゐたい。時が経つにつれて、たくさん知己を見出すやうな藝術が欲しい。

五年、十年、百年の後、ほんたうに残るものは眞人間の正直な言葉のみである。眞人間の藝術のみである。何の様な批評も、冷笑も、悪罵も、眞人間の言葉を滅すことはできない。

無責任な冷笑や、漫罵を投げかけた人々が滅びて行く時、眞人間の言葉だけは永遠に遺つてゐる筈だ。

×

私はいつも一人で歩いて行く作家を尊敬する。眞の藝術は到底いつも孤獨者にのみ恵まらべきものであると思ふ。

戦ふならば一人と一人の太刀打ちでなければならぬ。助太刀を持つやうな藝術家は大抵の場合端武者に過ぎない。

x
一つのスケールを持つて批評する批評家を排する。そのやうな批評家は、それ以上のスケールを必要とする藝術に打突^つかつた時は冷笑か、でなければ漫罵を浴びせかける。

藝術は自分の魂の全的燃焼である以上は、批評家の魂もまた全的に燃焼してゐなければならぬ。

x
一つのスケールを持つて批評する批評家のうちには、たとへば「より善き人生のために」といふやうな標語をかざして藝術を批評しようとする者がある。

しかし私たちの人生は、實は善惡といふことにこだはつてゐるには、餘りに深過ぎる、餘りに尊過ぎる。したがつて私たちの藝術は「より、善き人生のために」といふやうな、そんな狭いスケールでは量り得られないものでなければならぬ。

藝術が與ふる救ひは明日にはない。藝術の救ひは今日に在る。この刹那にある。藝術そのものの中に在る。人生と結びつけて初めて藝術の價值が生まれて來るものではない。救ひは藝術それ自身のうちにのみ在る。そして藝術の救ひは必ず「より、善き人生」のなかの

欠

欠

千住の市場

朝六時、坂本から千住大橋行きの電車に乗る。一三人の客があるばかりで、涼しい朝風が窓から流れ込んで来る。龍泉寺三の輪附近の横丁から稼ぎに出かける女人夫たちが後から後からと歩いて来る。大橋の袂で電車を捨てる。二三人の花を賣る男が車を止めてゐる。草花の種類も色も既もう秋らしいものが多い。橋板を架け替へ中の大橋の下を、濁つた水が流るゝともなく流れてゐる。荒川を下くだる一錢蒸汽も、朝早いので七八隻も岸にもやはれたまゝになつてゐる。素つ裸の男がせつせと甲板を洗つてゐる。客らしい男が二三人柳の蔭に腰を卸して待つてゐる。

大橋をわたつて一丁ばかりつゞいた町を通り過ぎれば、またそこに一つの橋がある。右も左も青々と繁つた葦の洲である。葦の間に見える水溜りには竿をかついだ男たちが釣場を探し歩いてゐる。「四十三年の大水の時にはこの橋があの鐵橋まで流れて行つた」と言ふ聲がす

るので、振りかへつて見ると、そこには中年の男が二人立つてゐて、一人の男が川下の汽車の鐵橋を指してゐた。

もう、そこからは青物市場の喧騒な聲が聞えて来る。柳やポプラの蔭には青物をはこぶ車が限りもなく列べられてある。夾竹桃と紅い薔薇が青い葉の間から際立つて見える。

車を押す男、車を曳く男、青物を肩にした男、馬鈴薯や、玉葱を數へて居る男、罵りながら男の後を追つかけて居る女、瓜のやま、玉蜀黍のやま、鱈の桶、桃の箱……何から何と、家の前の廣場々々に列べ立てた間には、買ひ出しの男たちが揉み合ふやうにしてたかつてゐる。露を帯びた青物を見るからに生新な感じを喚び起す。

四斗樽を倒さにした上には、肥つた男が胸をはだけて、大きな眞桑瓜を高く空に投げ上げでは「眞桑瓜！ 眞桑瓜！」としやがれ聲の限りをつくして人々を呼んでゐる。その隣の家ではベンコの上に立つた若い男が「三貫の葱！」と呼んでゐる。その下では男たちが狂人のやうになつて、指を二本出したり、引つ込ませたりして競り合つてゐる。家の入口の高い勘定臺の上では、二三人の男や、女たちが奇蹟とも思はれるほどは、いつこく、耳と手とを動かして、絶え間なしに筆を走らせてゐる。

この眼のまはるほどな渦のなかを、一人か二人の子供を連れた、または赤ん坊を背負つた女たちが、溝の縁や、車の下に落ちてゐる茄子や玉蜀黍などを拾ひ集めては汚れた風呂敷や、破けた袂のなかに入れてゐる。大かた荒川の土堤附近に住んでゐる乞丐で、もあらうか。背の子も、母の後ろに痕いてゐる子供も腐れかゝつた桃を大事さうにかゝへてゐるのが、傷ましい感じをあたへる。更に八十にも近いやうな老婆が道ばたの腐つた果物を拾うて頬張つてゐる姿などを見ては、人生のどん底の悲惨を想はずには居れぬ。

何の心もなしに疊の上に腹這ひになつて、両腕で腮を支へながら、通りの混雑を眺めてゐる少年や、または嬉しさうに四つか五つの玉蜀黍を小脇を搔い込んで落し、搔い込んで落してゐる子供を見ると、さすがに秋近い日の朝らしいのんびりした感じも湧いて来て、我れながらほゝ笑みたい氣もする。忘れられたやうにして、大きな鹽のなかに抛り出されてゐるたゞ一尾の緋鯉には涼しい朝日の光りが金鱗を動かしてゐる。

青物市場の喧騒を避けて葦の葉につゝまれた古橋の上に立つ。目路の限りは青い葦の川原である。蓮の白い花が遠い沼から見えるのもすが／＼しい。

巻頁を手にした若い女がはればつたい顔をして通る。頬から首のあたりに白粉がほんのり

と香つてゐる。並んで暖味屋の女將らしい白粉焦けのした年増女が通る。何かの講の連中が麻の衣を着た先達を車に乗せて、後から押すやうにして幾十人となく橋をわたつて来る。先達の頭に巻いた白い布が、印度の僧侶たちの頭に巻きつけた帽を聯想させる。白い手甲、白い脚絆に麻の着物を一様に端折つた同行の菅笠や菰が葦のなかにかくれてしまふ。

五六人の女の乞丐や子供の乞丐が、葦のなかの道を荒川の方へ歩いて行く。顔色の悪い、痩せこけた乞丐の子の肩に、朝の太陽の涼しい光が白く流れてゐる。銀鈴の音を想ひおこさせるやうな葦の嵐につつまれた水郷の市場では、やがて、人のどよめきや、罵りさわぐ聲も静まつてしまふ。

燕が草の葉の散らばつた市場の登いしだたみの上を優美な曲線を描いて翔りまはるころは、薄暗い店の奥の方では、疲れ果てた男や女たちが、いぎたなく午睡の夢をむさぼつてゐる。

人通りも減多にない登の上にまだ一人か二人の乞丐の子が、蓮根を拾つたり、真桑瓜を嚙つたりしてゐるのを見出す。

やがて鐘ヶ淵通ひの一錢蒸汽の汽笛が、けだるさうに水郷の正午の静な空気を、戦かしてゐるのが聞える。

のそくさと黒い牛が大橋をわたつて、秋近い草原のなかにかくれる。

貧しき者の春

一四二

二三日前から、裏の墓地の藪に来て鶯が鳴くやうになつた。私はこの淋しい裏町で三度春を迎へたことになつた。一坪の庭さへ持たぬ狭い家だが、二階の窓を明けると近所の大きな邸の梅などがちらほらと見える。天氣が宜い日にはかすかに筑波の姿も見える。大戦争以來急に煙突が二三本出来たので、ひところは殺風景な感じを抱かせたが、今ではそれすら、この寂しい裏町の單調な光景をかざる線としてなくてはならぬものとなつた。

私の窓にすれ／＼に、隣邸のカリンや棗がまだ冬された枝を見せてゐるが、雨に濡れた梢からは青い小さな芽生えが出て來た。さすがに春が來たといふ感じを湧かさせる。私は久しぶりで小半日も窓から薄曇りの空を眺めたり、近所の大きな邸の庭などを眺めたりすることがある。

「人間に生れたからには一度はあんな大きな家に住んで見たい！」

私の小さな窓に立つ毎に、家の女たちはさう言つて、お寺のやうな大きな屋根や、垣根から覗いてゐる梅などを眺めてゐる。

女たちの話は直ぐと大金持の噂に移つて行く。

あの邸から出て行く自動車は美しいが、奥さんらしい人の容色はあまり良くないといふことだの、三人のお妾がゐることだの、何とかいふ家の花嫁が百五十本の帯を持つて來たことなどが話される。

女たちの話が静まつたと思つて階下を覗いて見ると、近所のおかみさんたちが一緒に集まつて、車を挽いて來た一人の若い男を圍んで、一本一錢か一錢五厘の葱の取り引きをはじめてゐるのである。

「千住大橋の市場まで行つて買ふと、こんな葱は三厘くらゐだわ……」と高い聲で話してゐる女の聲が聞える。

女たちは自動車の話も、百五十本の帯の話もすっかり忘れてしまつて、貧しい取り引きに夢中になつてゐるのである。

私は狭い窓から墓場の方を眺めてゐる。私は不圖柳の芽生を見出す。さうすると私の心臓

は何か大きな発見でもしたやうに鼓動を昂める。「ほんたうに春が来たのだッ！」といふよろこびが、私の血管の端々までも波打つて行くのである。恐らくこのよろこびは、私たちの血管に流れてゐる原始人のたましひが、春を意識した刹那のよろこびであらう。私はかつて或るポーランドの作家の作品を読んだことがある。それは久しく故國を追はれてシベリヤにさ迷ふてゐた男の話であつたが、或る冬の日と同じ故國の男の肩から緑といふ言葉を聴かされて「それだ、それだ！」と言つて涙をながしてよろこんだといふやうな物語であつたと思ふ。緑といふたゞ一つの言葉は、その男に故國の春の光や、春の小鳥の唄や、ライ麦の波打つ丘を想ひ出させたのであつた。かつてかれが、ほしほしまゝに飛び歩いた故國の春を想ひ出した刹那に、その男のたましひはほんたうに生きてゐるといふよろこびを感じたのであつた。

私たちの祖先であつた原始人は恐らく幾萬年の間、或ひは幾十萬年の間緑の色につままれた野を *Vagabond* としてさ迷ひ歩いたのであらう。今日なほ世界の隅々にのこつてゐるデブシイの生活は恐らく、私たちの原始人の生活の倂をつたへたものであらう。

家を持たず、食物を貯ふることを知らなかつた原始人にとつて、冬といふものくらゐ恐ろしいものはなかつたであらう。したがつて春のおとづれくらゐよろこばしいものはなかつた

であらう。そこには豊かな收穫がかれ等を待つてゐた。そこには豊かな海の幸、山の幸がかれ等を待つてゐた。楽しい戀愛が待つてゐた。春はかれ等にとつてよみがへり甦であつた。

私は今近づいて来る春を待つてゐる。私の血管に流れてゐる原始人の血は蠢めき始めてゐる。

x

私は家を持たぬことを感謝する。富を持たぬことを感謝する。私は冷たい煉瓦のなかに縛られてゐる不幸な人たちでなかつたことを感謝する。人間を人間と見ることのできぬ官僚の徒でなかつたことを感謝する。

私は今日、この刹那に、家を飛び出して曠野の青い草の上に仰臥する自由を持つてゐることを感謝する。

私は官僚の徒でないが故に、私は家を持たぬが故に、私は貧しい民衆であるが故に、世界の何處にでも歩いて行くことができる。そして到る處に青い草を見出すことができる。そして胸をふくらまして思ふ存分春の空氣を呼吸することができる。

東そして西の風吹け。凡てそれは神のものであり、また私のものである。

南そして北の風吹け。凡て夫は神の物であり、私の物である。

二四六

x

かつて私は久しい間椅子を買ひたいと思つてゐた。學校を出て數年後であつた、私ははじめて一脚の椅子を買ふことができた。縁にクッションのついた眩懸椅子であつた。その椅子が私の貧しい室に運ばれた折のよろこびは今にも忘れ得ない。

私はさらに椅子に坐つて本を讀むやうな机を欲しいと思つた。それから數年経つた。はじめ買つた椅子の脚が損じ、縁のクッションが色褪せて來た。けれどもまだ机を買ふことができないでゐる。

しかし私は自分の生活を感謝したい。數年待ち望んで一脚の椅子を買ひ得たよろこびは、決して富める人たちの經驗し得ないよろこびである。

私は今、机を買ひたいと思つてゐる。私は新しい脊の高い机が、私の貧しい室に運ばれるであらう日を想像する時、心からのよろこびを感じる。貧しい者程明るい未來を持つてゐる。

x

今朝、近くの小學校からは、卒業式があると見えて、「螢の光」を唱ふ聲が響いて來る。あの唱歌の聲を聴くと、何となしにいつも涙が催される。

高等學校の教師をしてゐた或るスコットランド人が、或る時信濃の山間に行つて「螢の光」をうたつてゐる子供の聲を聴いて泣いたといふ話を覚えてゐる。それはあの歌の節が偶々スコットランドの詩人バアンスの "Auld Lang Syne" と同じものであつたので、そのスコットランド人の心がいたく打たれたからであつた。

私も小學を出る時は「螢の光」をうたつた。私たちのクラスの女たちは無論、男のうちにも泣いたものがあつた。そのせみか知らぬが、あの歌くらゐ今でも感傷的な氣持を喚びさますものはない。

x

二三日前千住大橋をわたつて荒川の方へ散歩した。土堤の下に大きな小學校があつた。夕方であつたが、二階からピアノの音がしてゐた。私は昔の小學時代の事を想ひ出した。小學校から程遠くない處に田圃や並樹などがあつた。

私は一度は田舎の小學にだけは教鞭を執つて見たいと思ふ。

貧しき者の春

二四七

昨日、上野の公園を通つた。竹の臺の芝草の上にかくさんの小學の子供たちが遠足をして来てゐた。みんな竹の皮をひらいて晝飯を食つてゐた。

私は直ぐ恒河の畔のボルプールに在る詩聖タゴールの林間學校を想ひ出した。

太陽と子供、草木と子供、戸外の空氣と子供、風と子供、小鳥と子供……私の空想は限りもなくつゞいて行つた。もし私にそのやうな機會があつたら、私は子供のための林間學校だけはやつて見たいと思つた。

供養の心

Sさん、私は十八日の午後から急に四十度ちかく發熱しまして、今に苦しんで居りますので纏まつた考へも出來ませんがお約束までにきれいな感想を書かして戴きます。

私の枕許には四五日前買つて來た室咲きのカーネーションと櫻草があります。私は人間の生死といふ大きな問題を考へて居ますが、この考へをもつと押ひろげて見れば私の病室を飾つてゐる二つの草花の命といふことに就いても、眞面目に考へて見なければなりません。私たちは自分の或る心の要求を満足させる爲に可なり残忍な無慈悲な行爲を繰り返して居ります。この二つの可憐な草花の生死に對する無關心、無慈悲よりも更に大きな罪惡をば人生そのものに對して犯して居ることに、ときどき驚かされることがあります。それは作家としての私自身の人生に對する態度の冷酷さに氣付いた刹那であります。

私たちは絶えず人生に對して出來るだけ鋭い批評の眼を注がうとしてゐるのであります

が、その動機がともすれば眞實に人々の運命をいたむ心からではなく、人々と共に悲しみを分つ爲でもなくして、自分の創作の爲の材料として、嚴肅な諸々の人生現象をば冷たい解剖の刀を握つて剖かうとすることがあります、何といふ恐ろしい人生の冒瀆でありませう。

無論作家が周圍の人々と共になつて泣き悲しみ、喜び、狂ひ立つて居たのみでは、ほんたうの藝術は生れないかも知れないが、眞實の作家の批評眼はすくなくとも周圍の人々より一層多くの悲みや、涙や、喜びや、怒を伴つて居なければなりません。心は嬰兒の如く、頭腦は大人の如き作家でありたいと思ひます。

然し現在の私自身の心は悲くも大人の頭腦のみをもつて小兒の心を失つたものになりがちであります。たとへば私の周圍の人々の上に悲しい事件が起つて來たとして私はそれ等の人々の悲しみを分つ前にまづ冷たい批評の刀を握る事を考へて居ります。小さかしい私自身の批判力を動かすことによつて嚴肅な人生そのものを切りさいなまうとしてゐるのであります。たとへば純心の光りに照らして見分けねばならぬ人生の諸相をば冷たい蕪雜な心の刀で切りさいなまうとしてゐるのであります。

キリストが大酒飲みであつたといふことや彼がまた永生を信じながらも、ラザロの死を聽

いて泣いたといふことは如何に彼が子供らしい、又人間らしい人間であつたかを想像せしむるのであります。

冷たい心の作家であることは心から憎みます。「我等笛吹けど彼等踊らざりき」といふ言葉があります。私たちが笛を吹く世間の人々の笛の音のみを批判してその笛を吹く人々の心を掬まなければならぬことを忘れてゐることが餘り多くあります。

× 笛の音を聴いてもなほ踊ることの出来ぬ自分の冷たい心を悲しみます。

私は昨年秋ごろから北海道のクチアンといふ町の一人の未見の青年から絶えず苦しい薄運な宿命を訴へた消息を聴いてゐます。青年は子供の頃片腕を切つてしまつて今では殆ど不治の病をいだき乍ら、一人の祖父とふたりで雪の深いクチアンの町に日々のパンを求めて働いてゐるのださうです。青年は内地から山の薪木を伐り出しに來た大勢の荒くれ男達の仲に交つて飯場の事務を執つてゐるのださうです。この冬は祖父(青年には兩親はなく只一人の祖父だけがこの世界にあるのです)と別れて歌捨の山まで出稼ぎに出かけたのですが、其處でも三日にあげず病にくるしめられて居るのでした。しかも青年は死の眼前にわなゝき

つゝも自分の苦しい心を筆にしては私に訴へてゐます。数日前の手紙では青年は雪を蹴つて再びクチアンの祖父の家に歸つて來たといふことであります。青年には世界に只一人の祖父と別れて居るといふことはパンを失ふといふことよりも、もつと苦しいことであります。たとへ不幸な二つの魂が深い雪の底に飢ゑ死なうとも彼等は相抱きつゝ死なんことを求めて居るのです。祖父は其不具な病身な一人の孫の爲に老身を提げて若い人々に交つて毎日雪の中を山に這入つて行くのださうです。

この氣の毒な青年にとつては生死の問題であるべき訴へもどれだけ私の心を暗くし動かして居るであらうかを考へると私は自分の冷たい批判的な心を呪はずには居られない。私にとつてはやゝもすれば雪の中に埋もれて居る不幸な二つの魂の運命を悲しむことよりは寧ろ一種の創作家としての興味をもつて彼等の生活を見ようとするやうな冷酷さが湧いて來ることがあります。

尊い人生の冒瀆者である自分自身を悲しまずには居られませぬ。

x

木を刻む彫刻家たちの間に「木の供養」といふ、やさしい營みが行はれたことを知つて居

ますが、絶えず冷たい批判の鑿を握つて生ける人生を刻んでゐる私たちの心にも木の供養を營む彫刻家達の感謝と、罪を詫る念を人生に對して絶えず抱かせて置き度いと思ひます。

おゝ、此水と積まゝ、親愛あり兄貴よ。
俺は今、慥くが有る。

備後の兄へ

さんどいも(馬鈴薯)鐵道便にてお送り下されますさうで、嬉しく毎日待つて居ります。去年の秋ちよつとお寄りした時、姉さんの手料理で鶏とさんどいもの御馳走にあづかつたのを今にも思ひ出して居ります。餘りいたゞき過ぎた爲でもありませんまいが、岡山あたりから腹痛を覚えて、夜が明けてから、一汽車だけ京都に下りて時雨に逢つたことなどを想ひ出します。姉さんも養蠶でお忙しい由、いつぞやお届けせし紅蔘は姉さんには大變利きましたさうでよろこんで居ります。あなたも養蜂やら、葡萄畑の手入れやら、却々のお骨折と存じます。「あの白い雲を見い。あの青い山を見い。大自然のなかのわしの生活も悪いもんぢやあるまいが」と言つて、備前境の青い山を指さゝれた折の、あなたの聲はまだ私の耳に響いてゐるやうです。

「兄さんは青い山が、白い雲が、と言つてお出でぢやが、あたしなんか、賑かな都會の方が

宜い」と言つて笑ひながら私の顔を見た姉さんの聲も、そのまゝに私の耳に響いてゐるやうです。實際あなた方に見送られて桑畑のなかの輕鐵の驛に歩いて行つた時は私も「これはまた餘りに寂し過ぎる」と思ひました。三里四里と見渡す曠野の中にたゞ二つか三つかの農家の燭を見出した時、何うしても私は姉さんの述懐に同情を持たないでは居れませんでした。

しかし現在の私は、あなたの土の香のなかに埋められた生活を、この上もない尊いものだと思つて居ります。私はあなたがそのまゝの生活を根氣強く打ちつゞけて行かれることを祈ります。三四年前に逢つた折のあなたには、まだ臺灣に渡つて生蕃の王を夢みて居られた頃の、夢に近い覇氣が満々としてゐました。恐らくあなたの心の何處かにまだ、捲土重來といつたやうな未來に對する熱意や覇氣が、隱忍蟄居してゐるのではないかと思はれました。

私はこの頃有樂座でチェーホフの「叔父ワーニヤ」といふ芝居を見ましたが、あなたの性格にはワーニヤの血が流れてゐるやうな氣がしてなりません。私はワーニヤが絶望の底にあつて尙「ドストイエフスキイもシヨッペンハワーも……」と叫んだ悲痛な聲を忘れる事ができません。私は「あの山を見い」と言つて居られる、いかにも田園を樂む人らしいおだやかなあなたの言葉の底に、隠さうとして隠す事のできないあなたの悲痛な反抗的な聲を聴きも

らすことはできませんでした。山を伐つて、田を賣つてそして近郷一番の村人の所謂「阿呆門」を構へて、傾きかゝつた、歴史的な名譽を持つた、古巢のなかに空嘯いて居られたあなたを涙の出るほど懐しい心で見ました。しかしあの門は畢竟するに世間に對するあなたの反抗的な霸氣の表徴でした。あなたの心の底には成り上り者に支配せられてゐる村の人々に對する冷笑がありました。侮蔑がありました。白眼視がありました。それだけ、あなたの田園生活は私に傷ましい感じを起させるところが多くありました。何時かはあなたの田園生活が恰度都會生活者が都會を熱愛するといつたやうな極めて自然的な生活になることを心から祈つてゐます。けれども私は「叔父ワーニヤ」を觀た時に思ひました、「一度インテリゲンチヤの世界に住んだ人間は、何のやうな暗い運命の下に生きなければならなくならうとも、インテリゲンチヤの過去の大きな夢を永劫に忘れることができない、そしてそのことがワーニヤの性格から生活の光や悦の殆んど凡てを滅ぼしてしまつたのでした。」

恐らくあなた自身も永劫に一人のワーニヤとなつて一生を送られるのではないでせうか。私は性格のなかに宿つてゐる悲しい人間の運命を想はずには居れません。

あなたはこのごろ心靈の交通といふやうな方面にも趣味を持つて晝間の農園の労働に疲

れ切つた體を、假作りの講堂に運んで村の青年たちを導いて居られるといふことですが、私にはそれがまたルウデインの計畫のやうにも想はれてならないのです。あなたが「講堂の建築費に抛りたいから東京の成金にでも賣つてくれ」と言つて送られた山陽や蕪村の掛物を持つて、私は可なり多くの家を訪ねてあるきました。あなたが送られたその他の書畫については、私のやうな何の鑑賞眼もない素人でも、殆んど價值のないものであることは直ぐに見當がつきました。流石に山陽と蕪村だけは何うかと思つて持ち歩きました。あの博物館で「拙劣な偽物」といふ鑑定を下された刹那には、私は失望といふよりは寧ろ一種の喜劇的な微笑を感じないでは居れませんでした。ばかに眞剣であつて、そして爲ることなすことが、如何にも素人臭い失敗に終るあなたの事業を想ひ出さずには居れませんでした。

ロシアの「叔父ワーニヤ」の破産は何處までもせつばつまつた冷たい、人間の力で動かすことのできない悲劇です。日本の「叔父ワーニヤ」の破産は何處か温かいゆとりがあるやうな氣がしてなりません。笑ひが潜んでゐるやうです。

私はこの頃、一層あなたが好きになりました。姉さんは私の計畫を話したら止めなさるかも知れませんが、私も將來、あなたのあの堂々たる「阿呆門」をくゞつてあなたのお弟子に

なるかも知れません。さんどいもの畑で労働をして見たいからです。白い雲や、青い山が人間の顔よりも懐しく思はれるからです。土の香が戀しいからです。

朝七時に家を出る。終日、本のなかの一字一字を拾ふ。訪問客の逡音に胸を轟かす。年中睡眠不足。出来るだけ客を避けて自分の時間を偷まうとする生活、これが何でほんたうの生き方でせう。

思ふ存分紺碧の空を見、薫ばしい空気を吸ひ、本を捨て、時間の觀念を忘れて、人間と人間とが結び付く田園の生活を除いては、正しい生き方はないと思はれます。太陽の光りの下で、葦の莖で書かれた文字を私は覓めてゐます。

私の腕はペンを握るよりは鋏を握むにふさはしい力を持つてゐます。私は屹度あなた以上の労働ができることを信じてゐます。私は十年後にあなたの葡萄畑に行くかも知れません。また明日行くかも知れません。何つちにしても私は心からあなたの生活を羨ましいと思つて居ります。

申後れましたが、本日小包郵便で、例の山陽、蕪村並に他の五幅をも一緒にして、お返しいたしましたからお受取り下さい。

基督の解放と無限

キリストの言葉は誰にでも——子供にでも——わかるやうに書かれてある筈である。平易に、わかり易く書かれたのがキリストの言葉であると言つたのはトルストイであつた。

誰にでも讀まれ、誰にでも愛せられ、誰にでも受け容れらるゝのがキリストの言葉である。頑迷な教派の人々のうちには今日尙ほ聖書無謬説を固持して、無理にもバイブルを固苦しい超人間の言葉のやうに信じてゐる人々もあるであらうが、トルストイやルナンが考へたやうに真人間の言葉をバイブルの中から見出すやうにしなければ、キリストはいつまでも教會といふ牢獄のなかに閉ぢこめらるゝ杞かしがある。

私は「キリスト解放」といふことを時々考へさせられる。「農奴解放」といふことは誰も言ふことであるが、近代思想の一つの流れとして、「キリスト解放」といふ大切な事實をも見のがしてはならないと思ふ。

キリストといふナザレの天才は千幾百年の間、教會といふものゝなかに閉ぢこめられてゐたのであつた。或ひは神、超人間といふやうな非人間的な概念の扉のなかに、押しこめられてゐたのであつた。然るにトルストイや、ルナンや、オスカア・ワイルドのやうな近代の人々は教會といふ牢獄のなかゝら、キリストを眞人間の世界に解放したのであつた。

キリストは教會のものでなく、私たち個人々々のものとなつたのであつた。近代に於ける農奴解放民主的運動といふやうなものも大事な仕事であつたが、近代の文藝家のキリスト解放はそれにも劣らぬ立派な事業であつたと思ふ。無論宗教改革に於けるルーテルの事業も一種のキリスト解放であつたにちがひないが、ルーテルが解放したキリストはやはり神の國のキリストであつて、人間の世界のキリストではなかつた。

人間らしい人間、人間の弱點をも、缺點をも持つたキリストを見出した文學者の一人はルナンであつた。私たちは近代の文學者たちによつて、ほんたうな意味で、友達としてのキリストを見出し得たのであつた。ルナンが見たキリストは神の子として宗教の籠のなかにあがめて置くにはあまりに人間的な人間であつた。キリストは宗教の樂園から追はれて私たちの穢土に落ちて來た。彼はほんたうな意味で、私たちの道伴れとなつたのであつた。

私たちが貧しいパンを食ふところにキリストがあり、私たちが戀を語るところにも、私たちが人を憎むところにもキリストがある。キリストは近代の文學者たちの力によつて、教會から離れて、世界的に人間個々のものとなつた。

恐らく今日キリストは、昔彼が娼婦マгдаラのマリヤと語つたやうに、醜惡な人間生活のどん底に友をもとめてゐるであらう。恐らく彼は廢娼運動者や基督教宣傳者たちを避けて無智な人々や、飲んだくれの間に友達をもとめてゐることであらう。

x

キリストの解放と同時に思ひ出すことは釋迦の解放である。私たち日本人にとつて最も親しみあるべき筈の釋迦について、實は私たちは纏つた知識どころではない何うかすると何にも知つてゐない。これくらゐ私たちの國民生活にとつて不幸なことではない。釋迦はもつともつと、寺院からも傳説からも解放されなければならぬ。

釋迦の教への尊さや、妙諦といふことは決して、一般の宗教家が考へてゐるやうなわかりにくいところにひそんでゐるのではないと思ふ。これもやはりトルストイのバイブル觀と同じやうに、衆生にもわかり易いところに釋迦の教への妙諦があると見るのが、至當であると

思ふ。釋迦の慈悲は衆生の魂の救済であつたに違ひない。それならば無智な衆生への釋迦の言葉は最も庶民的なものであつたにちがひない。

藝術の民衆化といふ言葉は數年來しばしば聞くことであるが、宗教界にこの聲を聴かないのは何故であらう。元々宗教は民衆化されてあるといふ意味からして、今更宗教界にそのやうな提唱の必要がないといふのであらうか。

しかし最も民衆的であるべき筈の宗教が實は民衆を忘れてゐる。少くとも今日の宗教は精神的に民衆の力となつて動いてゐない。私はわかり易く宗教を説けといふのではない。眞人間の釋迦、眞人間のキリストを眼の前に提示してくれる宗教家が欲しい。釋迦なりキリストなりに對して、少くとも戀人に對するほどの人間的な愛着を感じる程の心を個人々々のうちに眼さませてくれる宗教家が欲しい。更に深く、眞實にキリストなり釋迦なりを一般の人の心のうちに生かすといふ仕事は今後なほ藝術家自身の仕事としても意義あることであると思ふ。

x

ロシアの小説を讀んでみるとよく十字を切ることが書いてある。大抵の場合、殆んど無意

識にやつてゐることであらうが、あの飾り氣のない原始的な行爲の後には宗教上の無限といふ感じが流れてゐるやうな氣がする。十字を切ることを知つてゐる民族は祝福されてゐると思ふ。

日本でも念佛を唱へる人があるが、そんな人の生活の後にも、無限といふ感じが潜んでゐるやうに思はれてならぬ。

無限といふ感じを持つてゐない人の生活ほど淺薄なものはない。たとへ間違つてゐても宜い、何等かの形に於いて無限に對する憧憬をもつてゐる人の生活は濕ひがある。深さや神祕さが潜んでゐる。無限を感じることできぬ小賢しい民族ほどとうとましいものはない。

無限はあらゆる表現の神祕的な底力である。生命の母である。有限な人間生活の尊さも、ありがたさも無限な背景があればこそ生れて來る。

人と人との交渉、人と人との愛、人と人との憎惡も、その後、その底に、無限そのものの呼吸と、無限そのもの、脈搏とを持つてゐるが故に限りもなく尊い、また深い意義も持つてゐる。

善惡、愛憎、明暗の相刻せる表現が共に私たちの所有として人間の所有として純一絶対の

價值を持ち、光を持つ所以は、それ等の表現が絶対無限そのものゝ啓示であるからである。絶対無限の啓示を除いて生もなく、我もなく、光もなく、善もなく、悪もない。絶対無限そのものの脈搏と意慾とを賦へられてゐるが故に、凡べての造られたる個々物は無限の翱翔、把握、光明、睿智、生命を欲する。

こゝに悲しむべき人間の——または凡て造られたるもの——宿命が生れる。

私たちは無限を翔らんとする意慾を魂のなかに生みつけられた。けれども私たちの翅にはただ有限の時と處とに羽打つ力より他にはあたへられてゐない。

涯しもない翱翔の彼方に、無限はおぼろげな極光のやうに私たちの魂に映つて来る。まっしぐらに無限の影を目掛けて薄明の空を飛ぶ人間の夜鳥！ 彼等は無智ではない。彼等は知り過ぎる程翅の力の有限なることを知つてゐる。しかも彼等は無限への涯なき空を羽打つ。絶望の底の翹望！ それが凡て造られたるものゝ生である。

無限を背景とする生活は、人間の唯一の眞實生活である。絶望裡の翹望！ は最も恵まれたる人間の生活を動かす生命力である。

有限の翅をもつて無限への翱翔を敢てすることによつてのみ、生を實感することのできる

人間の宿命ほど、傷ましいものはない。更にその傷ましい絶望のなかにあつて、無限の愛を完成しようとした人々の生活ほど英雄的なものはない。

釋尊、キリスト、アシシのフランシスの愛の背景として、これ等の傷ましい絶望的な人間の宿命を置いて考へることによつて、私たちは一層切に偉大な人間愛の尊さや深さを感じる事ができる。

x

最後に私たちは無限への羈旅に於いて、人間のみが生きつゝ、歩みつゝあるのでないことをも知らなければならぬ。凡ての自然は絶望裡の翹望を力として生きつゝあるのではないか。

樹、草、雲、花、小鳥、獸、凡ては私たちの涯なき旅の道伴れである。そして凡てが個々のうちに無限そのものゝ呼吸と脈搏とを持つてゐる。

私たちは無限そのものゝ微光を、寂しい隣人のうちに、小鳥のうちに、或ひは石をもつて撃たれた不貞なるイスラエルの女のうちに見出すことができる。

プロメシウスの天上の炎は畢竟無限そのものゝ炎である。しかし人間に對しては永遠に無



限の天界への梯子は断たれてある。

たゞ私たちの周囲の人々のためにいたみ悲しめ。寂しい凡ての自然のために悲しめ 個
個の人間の中に、自然のなかに無限なるものゝ微光が、時として刹那的に閃くことがある。
刹那的に無限なるものゝ微光や呼吸や、脈搏を感ずることが、私たちにあたへられたたゞ
一つの神の祝福である

大正十年七月十一日印刷
大正十年七月十七日發行

(定價金壹圓貳拾錢)

◀ 小鳥の來る日 ▶

著 作 者

吉 田 絃 二 郎

發 行 者

東京市牛込區矢來町三番地
佐 藤 義 亮

發 行 所

東京市牛込區矢來町三番地
新 潮 社

電話番町
八八〇九番
九三六九番

番二四七一(京東)替振

印 刷 所

東京市小石川區西江戸川町
電話小石川五九二番

富士印刷株式會社

印刷者 佐々木俊一

吉田絃二郎氏著作

四六版假裝、五百二十頁
 ■長篇 無
 小説 限
 價貳圓貳拾錢、送料拾貳錢

第五版

淫蕩の血に呪はれたる無頼漢を兄とし、トルストイアンなる若き理想家を弟とせる多情多恨の一青年が戀に悩み運命に闘ゆるの終始を描けるもの。規模の雄大、結構の複雑、而して興味の深きは「カラマゾフの兄弟」の倂ありと稱せらる。

四六版假裝、紙數二百頁
 ■長篇 人間 苦
 小説
 定價壹圓、送料八錢

第拾貳版

人間生活の苦難を描いて、滿眼の涙を世の哀れなる男女に注ぎつゝ、しづかに運命を觀じて人生の歸趣を想ふ。まことに是れ魂を以て描き、血を以て描けるの小説と稱ふ可きものたり。添ふるに名作の高かりし「疲れたる魂」の一篇を以てす。

四六版假裝、三百五十頁
 ■短篇 大地の涯
 集
 定價壹圓七拾錢、送料拾錢

第七版

イエス・キリストの生涯を描ける大作「大地の涯」を卷頭として、作者近業中の傑作「清作の妻」、「初戀のこゝろ」等九篇を収む。精刻を極めたる人間苦の描寫は、高調なる人間愛の謳歌と相俟つて、純眞のヒュウマニズムを成せるを看ん。

久米正雄氏譯 (最新刊)

定價貳拾錢 郵送料拾錢

脚本 阿武隈心中
 選集

菊池 寬氏序 ■山本有三氏跋

久米氏が脚本の精粹を集めたるもの、氏自ら是れ予の脚本全集と呼ぶ可きもの也と云へり。四百五十頁の大卷。

菊池 寬氏譯 (第十一版)

定價八拾五錢 郵送料六錢

脚本 藤十郎の戀
 選集

菊池氏の作品中、最もよく舞臺に演ぜられ世評喧しき五名篇を集めて此一巻となす。藝術の爲めに人妻の愛を玩びて遂に死に至らしむるの悲劇「藤十郎の戀」以下、何れも脚本家としての菊池氏の面目潑瀾たるものゝみ也。

— 内 —
 牧場の兄弟
 金井博士父子
 夏の日の戀
 梨の花
 心中後日譚
 阿武隈心中

— 内 —
 藤十郎の戀
 屋上の狂人
 父歸へる
 奇談
 敵討以上
 (恩讐の彼方へ)
 — 以上 —

世評高き長篇小説

加藤武雄氏著

■ 悩ましき春

價貳圓、送料拾錢

佐藤綠葉氏著

■ 黎明

價壹圓六拾錢、送料拾錢

那珂勘助氏著

■ 提婆達多

價壹圓拾錢、送料六錢

有島生馬氏著

■ 嘘の果(常子の手紙)

價壹圓六拾錢、送料拾錢

北相模の寒村に在りて、文學に對する希望と、性の悩みに悶ゆる主人公が、東都に出で、中央文壇に身を投ずるに至るの徑路を描く。熱烈なる戀愛小説なると共に、文壇の或時期の如實なる好記録也。

天才的の若き美術家と、若き生命その物を代表する一人の少女とを主人公として人生の「黎明」を描く。描寫の迫真は云ふ迄もなし、一面、時代相を織り込めるの點本書の特色として何人も讚嘆する所也。

散文詩の如き稀有の名文章を以て秀麗なる貴公子提婆が苦悶の生涯を描く。中にも耶輪陀羅姫が彼の爲めに人妻の操を破るに至るの徑路は、絶妙の描寫と稱せらる。最も異色あり最も異彩ある作品也。

全篇、常子と呼ぶ良家に生れたる處女の、身を忘れ世を忘れたる悲しき情思を叙せる戀文より成り、滿幅の情炎人を焼く可き一大戀愛文學にして、また最近の文壇、稀に看るの傑作と稱す可きものたり。

世評高き長篇小説

吉田絃二郎氏著

■ 無限

價貳圓貳拾錢、送料拾貳錢

加能作次郎氏著

■ 若き日

價貳圓參拾錢、送料拾貳錢

藤森成吉氏著

■ 若き日の悩み

價壹圓四拾錢、送料八錢

藤森成吉氏著

■ 煩悩

價壹圓參拾錢、送料八錢

淫蕩の血に呪はれたる無頼漢を兄とし、トルストイアンなる若き理想家を弟とせる多情多恨の一青年が戀に悩み運命に悶ゆるの終始を描けるもの。規模の雄大と興味の深きとは、眞に稀に看る所なり。

近時稀有の長篇戀愛小説也。五百七十頁の大巻を満たすものは戀の幾事件也。一人の男を取りまく種々の女性によりて次ぎより次ぎへと起る戀の種々相が、著者の魅力ある筆によりて細描せられたり。

半歳の間に版を重ねること十數回、近時最もよく讀まれたる小説也。若き日の戀と戀に伴うて起る青春の悩みのいろ／＼とを描いて、斯くの如く痛切なるものなしと稱せらる。若き人々の熱讀を待つ。

激しき情熱と、高き理想とを抱ける一青年が、其の戀人の幸福の爲めに己の戀を犠牲とせる後の苦悶を描く。其悲痛なる戀の三身關係の多彩なる描寫は、「若きエルトルの悲み」を想はしむるものあり。

・ 作 著 イ ト ス ル ト ・

■ 戦争と平和 米昇曙夢氏譯 一冊貳圓五拾錢 送料一冊拾貳錢 冊三全

■ アンナ・カレニナ 原 白光氏譯 一冊貳圓參拾錢 送料一冊拾貳錢 冊三全

■ 復 活 中島 清氏譯 定價參 郵送料拾貳圓

■ 我 が 懺 悔 相馬御風氏譯 定價九拾錢 郵送料六拾錢

■ 人 生 論 相馬御風氏譯 定價五拾五錢 郵送料四錢

■ 性 慾、論 相馬御風氏譯 定價五拾五錢 郵送料四錢

■ 光ある ち 光の中を歩め 阿部次郎氏譯 定價五拾五錢 郵送料四錢

■ トルストイ日記 昇 曙夢氏譯 定價六拾五錢 郵送料六錢

■ トルストイ書簡集 石田三治氏譯 定價六拾五錢 郵送料六錢

終